

私の見てきたAMDDの10年 ～メディアとして～



医療ジャーナリスト 田辺 功

これまでに感謝し、今後に期待

節目となる創立10年、おめでとうございます。改めてホームページを見させていただき、私はAMDDの前身、ACCJ(在日米国商工会議所)の医療機器・IVD小委員会(以下、小委員会)時代を思い出しました。

朝日新聞記者の私は患者に役立つ新技術や新治療を重視していました。新治療の多くは薬より画像装置や検査法のおかげです。ところが、日本の機器メーカーは小企業が多く、「宣伝は厚生省に嫌われる」と、取材もほとんど拒否でした。そんな時に知ったのが米国の最新機器情報を持ち、しかも患者に広く知らせたいという小委員会です。小委員会は2002年から私たちメディア対象に、機器の新技术情報を提供してくれました。

私は2004年10月、小委員会が開いた一般向けシンポジウム「患者中心の医療に向けて」の司会をさせていただきました。演者の桜井靖久・東京女子医大名誉教授、日高進・日本心臓ペースメーカー友の会副会長は亡くなり、乳がん患者会・あけぼの会のワット隆子さんも40年もの会長職から引退されました。月日の流れを感じます。

小委員会とAMDDのおかげで、私たちは病気の最新治

療を学ぶことができました。売り込みたい低侵襲機器や技術に限らず、患者のQOL、感染防止や保守点検、医療経済などメーカーに重いテーマもあったのは、国民・患者が医療を正しく理解することが必要だとの欧米的な認識があったからでしょう。こうした活動がいろんな形で国民の知識や考え方を変え、欧米に比べて認可が遅いデバイスラグの改善などにもつながったと思います。

退職してからの私は新年の賀詞交歓会に参加するくらいですが、交歓会で、懐かしい顔を見かけるとうれしくなります。お役所の方ばかりか、企業の皆さんがライバル会社に転じていたりするのも欧米風なんて感心したりもします。

おかしなことに日本では昔から少しでも高くしたい医療側と、出費を減らしたい支払い側が、患者抜きで医療費の綱引きをしてきました。しかし、高齢者、そして高額医療が増えたいま、保険制度の存続が危うくなってきています。支払い側、患者ばかりか医療側にもよい制度を続けるため、むだな医療行為、過剰な薬や検査、コストと無関係の高額医療などの改善が緊急課題です。改めてAMDDの英知や指導力が問われる時代でしょう。

(元朝日新聞編集委員)